

講義 3

# 自然災害を乗り越えてきた 由布院の経験とチャレンジ



講師：一般社団法人由布市まちづくり観光局 事務局次長

**生野 敬嗣 氏**

◎Profile

大分県由布市庄内町出身。1969年生まれ、51歳。2004年、由布院温泉観光協会事務局員の全国公募への応募をきっかけにIターン。同協会ですべて初めて観光産業に携わる。その後、同協会事務局長を経て、2016年より現職。

## 改めて地域特性を考えるきっかけになった 大分県中部地震

この講義のお話をいただいた時には、まさか自然災害が起きるとは思わなかったのですが、コロナ禍に加えて由布院はまさに今、自然災害を経験しています。正直、頭の中がぐちゃぐちゃで、皆さんの前で話しできるようなことが本当にあるのかという状況ですが、これまで由布院や私が経験してきたことで皆さんのお役に立つようなことがあればと思います。

これは、由布院の観光客数の推移をグラフにしたものです(図1)。幸いなことに、何とか今まで順調に観光客数を伸ばしてきて今がある状況ですが、それまでに、ここに書かれているような4つの危機がありました。これらの危機に由布院ではいろいろなことをやってきたので、その一部をご紹介します。

最初の危機が、大分県中部地震です。1975年(昭

和50年)に由布院の隣の町を震源地として発生し、私は小さい頃にこの地震で被災したので、今でもトラウマのように覚えていて、本当に怖かった覚えがあります。この写真が当時の新聞やテレビで報道されたものです(図2)。

当時は由布院の観光客がまだ少なかったのですが、この衝撃的な写真が全国に発信されることで、他の施設や道路も同様に壊れているのではとか、由布院温泉は壊滅的で、とても観光に行ける状況ではないというイメージが全国に広がりました。

これが一日にして観光客が激減するきっかけになりましたが、由布院で自然災害に向き合っていく取り組みは、ここから始まったのではないかと思います。そういう中で、地域の先輩たちが何をしたかという、まず「由布院は元気ですよ!」という情報発信が必要と考えました。

具体的な取り組みの一つが、観光辻馬車です(図3)。

図1

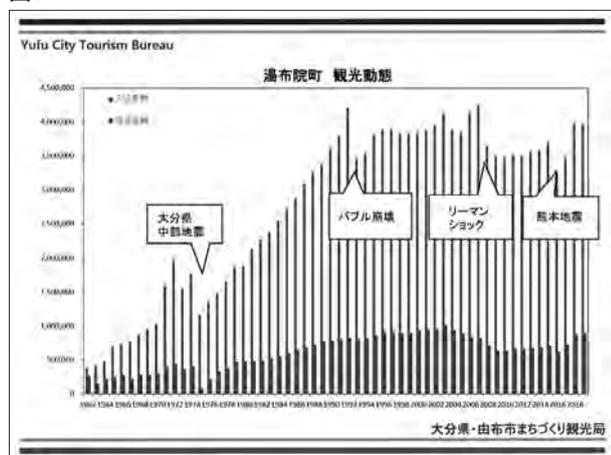


図3



図2



図4



対馬の対州馬という古来種の馬を使って馬車をひき始めました。まちの中を馬車が走るというのは、当時は全国的にも珍しく、由布院の雰囲気合っている取り組みで、非常に注目を浴びました。

地震が発生してから、馬や馬車を買付けするまで1年もかからなかったということで、こういうことを思いついて即実行するスピードの速さに驚きますが、先輩たちがヨーロッパを視察してきたことも関係があるかもしれません。また、昔は由布院で林業が行われ、木の切り出しなどに馬が使われていたこともあり、そういったことも生かしてまちの中に馬車を走らせたと言えます。

もう一つが、ゆふいん音楽祭です(図4)。地元クラシック好きな方がいたことも大きいのですが、地元の楽団に来てもらって最初は星空の下でコンサートを始めました。由布院の高原で、気持ちの良い野外で素敵なクラシック音楽を聴くという由布院の雰囲気にマッチしたイベントを作りました。

もう一つが、湯布院映画祭です(図5)。これはシンポジウムの時の写真で、町の公民館が会場となっており、集客数としては非常に少ないのですが、奥に映画関係者とゲストの方、手前に観客の方々がいて、映画を見た後にやり取りをするのがこの映画祭の特徴です。これも、映画好きなまちの人が企画を持ち込んで始まりました。今年はコロナ禍に加えて自然災害が起きたので、開催をどうしようかと考えていますが、毎年8月下旬に開催されています。温泉地としては珍しい、映画祭や音楽祭といったイベントが開催されているのも

由布院の特徴だと思います。

映画祭は大分県中部地震の翌年から始まりましたが、牛喰い絶叫大会など、今も続いているイベントのほとんどが大分県中部地震から1年以内に始まりました。こうしたイベントを立ち上げたのは、最初にお話ししたように、由布院は元気ですよと発信することも目的の一つですが、同時に由布院とはどういう地域なのか、地域のあり方や地域特性を情報発信していかうということもあり、今でもそうした精神を引き継いでいます。

そういうことを考えるきっかけになったのが大分県中部地震で、自然災害が地域特性や情報発信について考えるきっかけとしても、非常に大きな影響を与えたのかなと思います。

## バブル絶頂期に由布院らしさを守る 「潤いのあるまちづくり条例」を制定

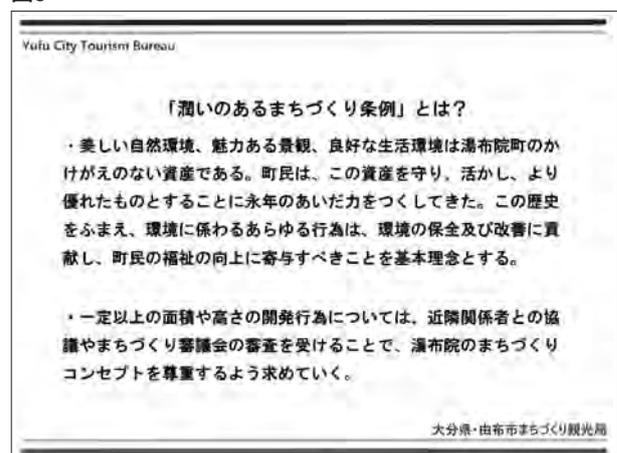
自然災害ではないですが、日本全国で起きた出来事に1980年代後半から1990年代初めのバブル期があります。もともと由布院は、日本が高度成長時代に「由布院の自然を守る会」を立ち上げるなど、古くから自然を大切にしてきた経緯がありますが、バブル期は改めて、地域で自然の大切さを考えるきっかけになりました。

そういう中で由布院らしさを守ろうということで、バブル絶頂期の1990年(平成2年)にできたのが「潤いのあるまちづくり条例」です(図6)。その頃は、田んぼ

図5



図6



一反1億円という物件もあったと聞きますし、まちの中が一気に変わってくる時期にありました。

潤いのあるまちづくり条例は、そうした世間の流れとは違う方向で考えられ、民間と行政が協力してできた条例です。大規模開発の抑制が大きな目的で、一定以上の面積や高さの開発案件については、由布院のまちの近隣関係者と協議し、さらにまちづくり審議会で審査をし、緑のある開発を開発事業者に尊重いただけるよう求めるというものです。それ以降、大規模開発を極力抑制する動きになっています。

この条例と合わせたもう一つの取り組みが、由布院の「ムラ」の風景を作ることで、2000年（平成12年）3月に「ゆふいん建築・環境デザインガイドブック」が作られました（図7）。条例には難しい言葉が並び、なかなか具体的なイメージが湧きづらいところがありますが、このガイドブックでは言葉だけでなくイラストや写真を入れて、具体的にどのような景観を作っていくかを説明しています。

観光関係者、住民や行政の人たちが参加して協議会を作り、編集はその協議会で行いました。当時は町内の全戸に配布した他、開発事業者にも配布し、由布院のまちづくり、景観についての考え方を理解してもらい、「私たちのまちはこういうことを尊重しているので、なるべく守っていただきたい」と示してきました。

2011年（平成23年）に改訂版が作られ、市町村合併で湯布院町から由布市に変わった後は由布市に協力をいただき、開発案件で相談に来る事業者には、「由布院のこれまでの考え方が書かれているので、尊

重していただきたい」と、このガイドブックを渡していただいています。

次の危機がリーマン・ショックによる世界的な恐慌で、景気の後退によりお客様が一気に減少する事態を迎えました。由布院も昔からずっと右肩上がりであるが、一時下がっても持ち直しながらやってきましたが、景気の落ち込みによってまた違う形の危機を迎えた形です。

その前から由布院の観光組織では世代交代が進められていましたが、これを機に一気に改革が行われた時期になります。左側は、この時期に由布院温泉観光協会が作った由布院温泉のロゴです（図8）。今、観光協会も旅館組合も使用していますが、ロゴのデザインをリニューアルして商標登録の申請をしたり、組織改革の面では、当時会社法の改正が行われており、任意団体から移行しやすかったタイミングに合わせて一般社団法人に法人化しました。

また、協会役員の人事を一新し、理事の平均年齢が40代に若返りました。それまでも由布院では早め早めに次の世代にバトンタッチをしてきましたが、リーマン・ショックでこれから先どうなるかわからない状況の中、より若い人たちに組織に理事として入っていただき、まちづくりをする人たちを増やしてきたと言えます。そうした組織改革により、次の時代に向けてステップアップをしていこうと考えていた時期だったと思います。

また、女性の社会進出が必要と以前から言われていても、なかなか実現できなかった頃に、由布院は2代

図7

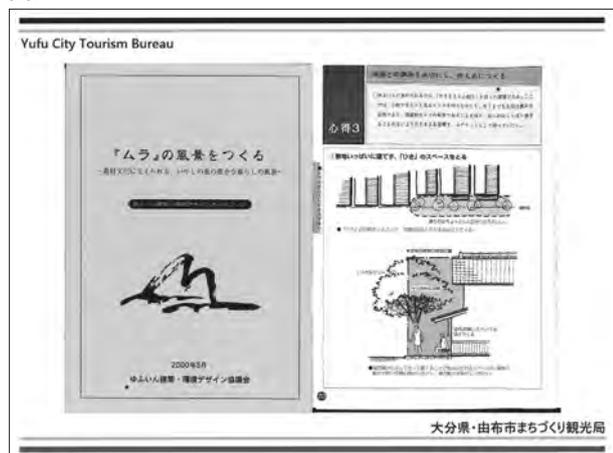


図8



続けて女性の観光協会長が就任しています。私が由布院に来た時の協会長も、代替わりした次の協会長も女性です。私が由布院で仕えた2人の女性協会長はどちらも、とても素敵な方たちです。自分が男性だからそう思うのかもしれませんが、この方たちに女性ならではの素晴らしさがあったのも、組織が変わっていく大きなきっかけになったのではと思います。

## 熊本地震の対応 その1 ～観光関係者でLINEグループを作り、 密に連絡

ここから、自然災害についてのお話をします。2016年(平成28年)の熊本地震以降、私はこういう場で自然災害にどう立ち向かってきたかを話すことが多いのですが、自分では好きでやっているわけではなく、たまたまそういう自然災害に遭いながら、勉強したことが多かったと思います。特に熊本地震は自分が働いてきた中で、また由布院にとっても近年の大きな転換のきっかけになったと思います。

行ったことは大きく分けて2つあり、地域内の連携強化を図ったこと、情報発信のあり方を再考したことです。そこで何を参考にしたかという点、冒頭で紹介した大分県中部地震後の対応で、先輩たちからも、「自分たちはあの地震の中でやってきた。あなたたちもできるはずなので、頑張り」とお声がけいただきました。過去の大きな地震の経験を踏まえて臨むことができたのは、大きいと思います。

2016年4月14日に熊本地震の第1波が発生し、2日後の4月16日の夜中、再び熊本を震源地とする地震が発生しました。まさか自分たちのところにも及ぶと思っていなかったのですが、第2波は最初の地震に誘発され、別の活断層が動いて起きた地震とも言われ、由布院も震度6弱と非常に大きな揺れが襲いました。大分県内では由布院地域が大きな被害がありましたが、県内の他の地域は特に大きな被害がなく、由布院が被害に遭ったことをご存じない方もいました。

夜中に地震が起き、明るくなって「さあ、どうしよう」と非常に混乱したことを覚えています。新聞記事にタクシー待ちの行列の写真が掲載されていますが、全ての交通機関が止まり、タクシーでしか移動できないので、長い行列ができていました(図9)。この時はお客さんがたくさん来ていた時期だったので、我々も驚きながらお客様の誘導をしていました。

これは、当時の目抜き通りの写真です(図10)。左は地震発生前の休日に人がたくさん歩いている様子です。右は地震の翌日頃に同じ通りで撮ったもので、一夜にしてたくさんのお客様がまちから消えました。

そういった中、由布院でやろうとしたことは、私が所属する一般社団法人由布市まちづくり観光局というDMO、行政、観光関係者が情報を共有し、連携を強化するとともに、役割分担を明確にすることです。危機が起きた時には、いろいろなことに対応しなくてはなりません。誰が何をするか、役割分担をどうするかは熊本地震の時から考えられるようになりました。

その具体的な事例が、LINEグループを活用した公

図9



図10

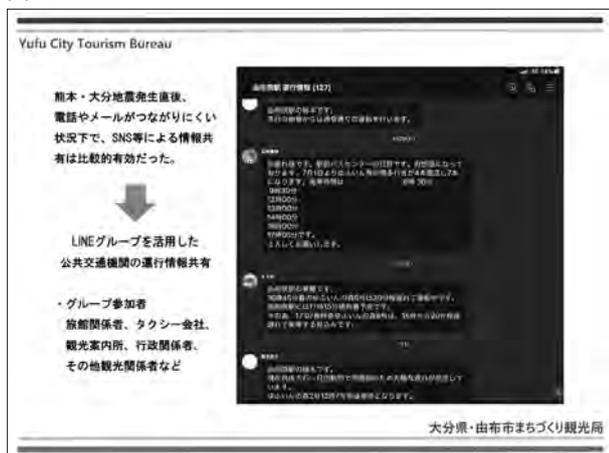


公共交通機関の運行情報の共有です(図11)。由布院は公共交通機関がJRと高速バスのみで、何かあれば止まるので、以前から情報共有をどうするかと言われてきました。熊本地震発生直後は、電話やメールが繋がりにくく、対策本部で情報共有しようと思ってもできない状況でしたが、我々の仲間の一人がLINEを送ってきて、LINEでのやり取りが一番スムーズに、ほぼリアルタイムで情報共有することができたため、これを機に生まれたグループです。

写真の上の投稿は、駅前バスセンターの方からです。最近のコロナ禍でバスの本数が減っていたので、それに関する情報です。その下はJRの方からで、特急列車の到着の遅れや運休情報などがリアルタイムで流れてきます。このグループには観光関係者や旅館の方々、タクシー事業者も入っていて、公共交通機関の遅れなどの情報をここでつかむことで、早め早めの対応ができます。今も、このグループLINEのおかげで必要な情報がリアルタイムに入ってくるので、情報共有がうまくできています。

また、コロナ禍でも我々が行っているのは、行政を含めた由布院を中心とした観光関係者による週1回程度の情報共有です。これから何をするか、すでに行ったことはどうだったかを検証し、共有して次に生かしていくためのものです。もともと、由布院の人たちは仲がいいこともあり、こういうことをやろうよと言ったら、一気に広がり、今も続いています。

図11



## 熊本地震の対応 その2 ～取材窓口を一本化、地域を伝えるには「宣伝ではなく表現を」

熊本地震発生後の4月17日から2週間の間に、私のところに来ていただいたマスコミの数は34社でした。同じ会社で違う部署だったり、同じテレビ局で違う番組だったり、次から次へと押し寄せて合計100人以上が来られました(図12)。

今も同じような状況にあります。災害が発生した時の情報発信はこんなに大変なものなのかと改めて思いました。我々はポジティブ情報を発信したいけど、マスコミの方々はネガティブ情報を欲しがるので、なかなかうまくマッチングしません。そういう中で行ったことが、マスコミへの対応窓口を一本化しようということです。

いろいろな人がいろいろな角度から話してしまうと、何が本当かわからなくなるので、現在の由布院の大雨についてもマスコミ対応は私が行っています。そうなくても、インターネットやSNSでいろんな情報が飛び交っており、特にテレビなどは影響力が大きいので、地元のテレビ慣れしていない方々が話すと、誘導尋問のようにストーリーを作られた中で話してしまい、お涙頂戴のストーリーが出来上がったり、必要以上にネガティブな情報が流れたりします。

現場がパニックの中で取材を受けてしまうと、思っていたのとは違う話をさせられてしまうことも起きます。宿や観光施設に「マスコミから問い合わせがあった場

図12



合は、必ず観光局を通してください」とワンクッション置いて、窓口を私に一本化することで、きっちり情報統制をしていかないと、非常に危険であるということを熊本地震の時に学びました。

今回の大雨でもやはり、マスコミはネガティブ情報だけを欲しがるといことがありました。由布市内で避難する途中で川に流されて行方不明になった方がいるのですが、その方の同級生を探しているマスコミの方がいるという話が入ってきました。私に対応したのですが、すでに現地の方々がそのことについて話している中で、さらにそれを拡大するような行動が必要なのか、「どういう情報を出していくか、一緒に考えていきませんか」と、マスコミの方といろいろと話をさせていただきました。熊本地震の時に対応がひどかった報道機関には、出入禁止にしますと言ったところもあります。そのくらい強い姿勢を持っていかないと、どうしても受け身になってしまいます。

熊本地震の後、すぐに私は熊本城を見に行っただのですが、本当に好き勝手に報道されているのを目の当たりにして、非常に痛々しく感じました。取材を受ける側も、きちんとした態度で臨むべきだと感じているところです。

今回の大雨被害でも同じ市内で一番端の挾間地区で川が氾濫し、家が流された様子がテレビで流されました。由布院のまちの中は被害が出ていないこともあり、全くテレビスタッフが来ないのですが、そうすると私の知り合いから、「由布市とテレビで言っているのを見てみたら、どこの町かわからないが浸水した様子

が出ていた。由布院が浸水したと勘違いしてしまった。」と言われました。なかなか普通の情報はこういう時期に出てこないの、我々のほうから積極的な情報発信をしていくことを心がけています。SNSが一番手軽に発信できるので、観光協会や地元の有志がテレビや新聞報道では報じられないリアルな町の様子を発信しています(図13)。右側の写真は、「力をあわせ乗り切りましょう」と書かれ、JRの駅長から宿泊施設に送られたFAXを紹介した投稿です。仲間が一致団結するためにも、こういったものを情報共有し、外に対してもリアルな現場の様子を写真とともに伝えていくことは非常に重要だと思っています。

あとは「宣伝ではなく表現を」ということで、ただの宣伝ではなく、地域を表現していこうと我々の地域ではよく言っています。これは、広告宣伝の一例です(図14)。由布院は広告を打つことはほとんどなかったのですが、熊本地震の後、地元からの情報発信が必要ということで、写真を使って時間ごとの由布院の過ごし方を紹介しました。

由布院は、これという観光素材があまりたくさんあるわけではないので、写真だけでなく、説明を加えないと具体的なイメージが伝わらないということでこういう形にしました。また、由布院はどうしても名前が先行してしまう部分があるので、こういう場所であるという発信を改めて行いました。

図13



図14



## 事実や経験を記録し、後から誰でも見られるようにすることが大事

コロナ禍を機に今後、由布院はどう変わっていくのか、現段階では全くわからない状況です。さらに、今回は自然災害も加わってしまったので、本当にどうなるのかと思いますが、当然生業なりわいを作っていけないといけないですし、この地域を生かしていく、このまちを残していくために、我々は頑張っていかなければいけないと思っています。

そういった中で、私が最近大事だと思うのは、その時に起きた事実を記録し、保存することです。コロナ禍で起きている現象は、多分誰も経験したことがないと思います。現場もパニックになってはいますが、昔、災害を受けた時に先輩たちがそれを記録し保存してくださったおかげで、私たちは当時どうだったかを見ることができ、経験として生かすことができるので、非常に心強いと思っています。

今のコロナ禍と自然災害の中で、自分たちの地域が何をやってきたのか、会社が何をやってきたのか、お客さんはどうだったのかという事実を可能な限り記録して保存し、さらにそれを誰でも見られるようにしておくことが重要ではないかと思っています。今、起きている事実を「経験知」にするということですね。

今、まさに対応している最中で、皆、自分たちのことでいっぱいだと思いますが、そういうことを意識することは、次の世代のために必要なことかと思っています。経験したことは未来の財産になると思うので、記録し、それを保存して閲覧できるようにすることが非常に大切だと思います。

このコロナ禍の中、皆さんの地域でも、新たな自然災害が発生するかもしれません。自分の地域を改めて見直したり、過去にどういう経験知があったのか、改めて見直しておく、いざという時のために役立つのではないかと感じます。

最後に、コロナ禍でいろいろと考えていた中、由布院の綺麗な映像を集めた動画を作りました。こちらをご覧ください、終わりたいと思います。

(動画上映)

## 質疑応答

**福永** 由布院、本当にきれいですよね。やはり由布岳の存在は、地元の方たちにとってはシンボリックなものでしょうか。

**生野** いろいろな地域で山が身近にあり、山岳信仰のようなものもあると思いますが、やはり由布院にとって、由布岳の存在は非常に大きいと思います。動画の最後に由布高地のふもとに広がるまちを表したかったので、あえてドローンで撮っています。

由布岳の麓に広がるまちや暮らしが、過去も今も我々の生活の原点であることは間違いないというのを、改めてこのコロナ禍で考え直したというか、自分たちが考えるきっかけにもなる動画でした。改めて自分の地域を見ると本当にきれいなんだと、こういう機会が自分の地域を考えるきっかけになるのかなと改めて思いました。

**福永** お話の中に出てきた「宣伝ではなく表現を」という言葉が印象的でした。

**生野** すごく難しいですが、由布院の場合は写真とキャッチコピーがあって、というポスター的な広告は、どうしても由布岳の写真になってしまっていて、「また由布岳か」となってしまいます。イベントの情報発信も含めて地域の暮らしや、どういう地域なのかという説明書きがどうしても必要だと思います。その説明書きを「表現」という言い方をしていますが、どういうものかきちんと説明できるようでない、一過性のものに終わってしまうのではないかと考えています。きちんとしたファンをつかむためには、そういったストーリーをご理解いただくために、単なる広告ではなく表現することが共感を生むのかなと強く感じています。

**福永** そこが非常に重要だと思うのですが、表現をするためには、自分たちが自分の地域のアイデンティティをきちんとわかっている必要がありますよね。

**生野** そうですね。地域の強みが何なのか、観光に限らずこのまちにとって何が大切かを含めてきっちり認識しないと表現できないし、ブレてしまうと思います。理念を含めた地域のあり方について「あっちではこう言ってたのに、こっちではこう言ってる」ということがないようにしないといけないなと感じます。他の地域の

方から、私の話を「理想論でしょう」と思って聞いていたら、「由布院の他の人も同じようなことを言っていて、びっくりした」とたまに言われます。そういうことが大切なのかなと思います。

**福永** 口で言うのは簡単ですが、実行するのは難しいことだと思います。さて、参加者から質問が来ていますので、うかがっていきたいと思います。「普段から、地域内の各事業者、行政、それぞれの観光関連団体、あるいは報道機関との信頼関係がないと、いざという時に連携するのは難しいのではないか」という質問です。

**生野** 熊本地震の前にそういう連携があったかと言うとそうではなく、熊本地震を機にそうしたほうがいと皆さん実感したところがあります。今はすんなりとお互いに「じゃあ、よろしくね」と言えるようになっていますが、いろいろな人がいろいろなSNSを通じて情報発信できるからこそ、公式な情報発信の窓口はきちんと1つ持つておくことは大事だと思います。

政府にもスポークスマンがいるように、地域でも災害などの時の対応窓口を誰がやるか、を決めておいたほうが良いと思います。そうでないと、発信する情報がバラバラになりがちなので、窓口は一本化しましょう、取材を受けるにしても、必ず一声かけてくださいねと言っています。

**福永** 観光関係者がLINEで情報共有していることに参加者が注目されていて、「運行状況をLINEで共有することは素晴らしい。駅員やタクシー運転手などがメンバーだとリアルタイムで共有でき、災害時はもちろん、観光客の動向や様子も共有できて、業界の展開にも役立つのではないか」というご意見をいただいています。また、「LINEも含めて由布市まちづくり観光局の役割は大きかったのでしょうか」という質問と、「行政もそのグループに加わっているのでしょうか」という2点の質問をいただいています。

**生野** 九州の片田舎なので、自然災害と常に向き合わなければならず、熊本地震の2カ月前に大雪が降って鉄道や道路が止まり右往左往したのですが、その時の経験が熊本地震の時に役立ちました。行政は行政でやることもあるので、民間の我々と情報共有しながら、これはこっちがやりますということにしています。

その時は観光局ができる前だったので、新しい組織を作るために私は行政と同じ場所で働いていました。今も観光局では行政からの出向者が民間のプロパーと共存していますし、今日の午前中にやっていた会議でも、地元の行政と観光事業者、観光局が入って情報共有をしています。

LINEグループは観光局と交通事業者が中心になっていますが、広げていくには、コアとなる団体などが声をかけることで、広がりやすくなるかと思います。できそうでできないことかもしれませんが、うちは田舎なので列車が1本遅れるだけでも大変で、こういうグループが1つできるだけで、結構便利なのが多いと気付かされました。

ただ、今自分たちはこういう状況だからどうしようなど、何かあれば情報をあまり隠さずに共有することも大事だと思います。バスやタクシーの事業者にも入ってもらっていますが、今回起きた豪雨で、また長い間鉄道が通らないかもしれないので、熊本地震を機に災害時だけでなく、いろいろなところでいろいろな対話をするようになったことは非常に大きいと思いますし、日頃の関係性はいざという時に非常に役立つのではないかと思います。

**福永** 今まで由布院では自然災害が多かったのですが、今回のコロナ禍は今まで経験したことがない状況でどういった対応をしているのか、仲間の皆さんのモチベーションを維持するためにどういったことをされていますか。

**生野** 週1回の連絡会を行っていますが、オンラインではなく各団体からなるべく最低限の人数に出てもらって、ソーシャルディスタンスを保って今朝も行いました。実際に顔を突き合わせることの大切さを改めて感じています。

この連絡会はコロナ禍の中で毎週行っていますが、何も明確な答えが出てこず、どうしようと思っているとこころに大雨という自然災害が起きました。そういう時の仲間は多ければよいというわけではなく、身近に本当にきちんと相談できる人を作っておき、そういう人たちとオンラインでもリアルでも話をするのが大切です。そこに仲間の姿があるということだけでも心強いと思います。そういうことがないと、心が折れるといい

ますか、みんなで話していても無言になってしまうこともあります。そうやって集まって議論をすることは由布院ですってやってきたことなので、コロナ禍でも変えられないことの一つでもあり、大切なのかなと思います。

本当に、事業者さんのモチベーションをどう保つかが一番の問題で、一緒にやっという雰囲気を作るには、やはり普段から会っておかないと、いざという時に難しいかなと思っています。

**福永** ちなみに今回のコロナ禍では、どういった取り組みをされたか、いくつか教えていただけますか。

**生野** 本当にどうしようと悩んでいることが多いのですが、行政にやっていただいているのは、地元の店舗への家賃補償や協力金などで、たまたまGo Toキャンペーンに合う形で、宿泊していただいたお客様に次月から使える商品券をお配りして、地域で使っていただくという取り組みもしています。

あとは、どう情報発信するかがなかなか悩ましいです。「来てください」ともなかなか言いづらく、今日の会議でもどうしようという話になったのですが、Go Toキャンペーンに合わせて配布する商品券と一緒に、お客様に切手付きの由布院の綺麗な風景のポストカードを差し上げ、「コロナ禍でなかなか会えない人に、旅の思い出を送ってみませんか」という形で、口コミを広げることができないかと。自分たちの口から来てくださいとは言えないけど、泊まったお客さんに自分の思い出を発信してもらおうことが、一番信頼に繋がるのかなと考えています。行きづらいと思っていたけど、自分の知り合いから聞くことで、「ああ、由布院に行けるんだ」と安心して行けるという雰囲気になります。しかし、こういった中で自然災害が起きたので、みんなで足並みを揃えてという形にはなかなかできないですが、できるところからやっという状況です。

**福永** 観光事業者や地元の方の人材育成のため、辻馬車を使って由布院のまちづくりの歴史などをみんなで学べるプログラムを作られたという動きもあったそうですね。

**生野** 外の地域から来て旅館で働いている若い従業員もいますが、普段、辻馬車がまちの中を走っていても、お客様がいっぱいで乗ることができなかったの

で、せっかくならこういう機会に乗って体感してもらおうと思いました。観光局がプログラムを提供して、体験していただくと。私もガイド役をしたりしています。観光業界の方には料金を割引して、「研修がてら、乗ってみませんか」と言っています。何かしらプラスに変えられることがないかと考えて、思いついたことです。

**福永** 講義1や2の話もそうですが、こういったリスクに直面すると、自分の地域や観光の今後のあり方、今後どういったお客様に来ていただきたいかを考え直すきっかけになると思います。由布院の場合はインバウンドのお客様が増えて、特定の場所に集中するといったことも起きていましたが、今は地元の方から「原点回帰」といった言葉も聞かれますね。

**生野** インバウンドに関しては誤解を受けている面があり、コロナ禍で「由布院はインバウンド比率が高かったの、大変でしょう」とよく言われるのですが、由布院の外国人比率はもともと20%でした。この数字は、由布市のホームページなどでも公開されています。多分、もっと多いというイメージを皆さん持っておられると思いますが、結果としてこの数字になったということであって、我々があえてインバウンドを増やそうと意識してきたわけではないです。

我々のターゲットは国内の旅行者であるという意識は以前からずっと持っていて、今年度は近場の方に普段からもっと来ていただくというのがコロナ前から掲げていた目標なので、今回改めて原点に戻り、その目標に向けて取り組んでいきたいと思っています。

**山田** 災害続きで大変なところ、ご登壇いただきましてありがとうございます。由布院の取り組みをしっかりとお伝えいただき、コロナだけではなく、観光地はもともといろいろなリスクを抱えており、何が起るかかわからないわけで、準備していたからどうにかなるものでもないのですが、やはり体制を作っておいて、何か起きた時にそれに対して柔軟に、ある程度集中的かつ戦略的に対応していけるかが大きなポイントではないかと思っています。そのあたりについての確な情報をいろいろといただけたと思います。どうもありがとうございました。でも、踏んだり蹴つたりのように、毎年のようにいろいろなことが起きるのって、大変ですね。  
**生野** 勘弁してほしいというのが正直なところす

(笑)。4年前に地震があり、その翌年に九州北部豪雨があつて久大本線が流され、やっと平和な年が1年あつて「何もない日常っていいよね、今年も続くといいよね」と言っていたらこうなつたので、「何か我々、悪いことしましたっけ」と言いたくなるような気持ちです。雨も毎年のようにひどくなっていますし。でも、そういう中でも前を向いてやっていくしかないなと思っています。

**山田** 九州では、JR九州も非常に熱心に観光に取り組まれていて、由布院ともいろいろと連携されていたのが、今回の豪雨の直撃を受けてしまい、本当に大変な状況だと思います。地域でのいろいろなつながり、事業者間のつながりで乗り越えていかれることに期待し、応援していきたいと思います。今日は本当に大変な中、ありがとうございました。

